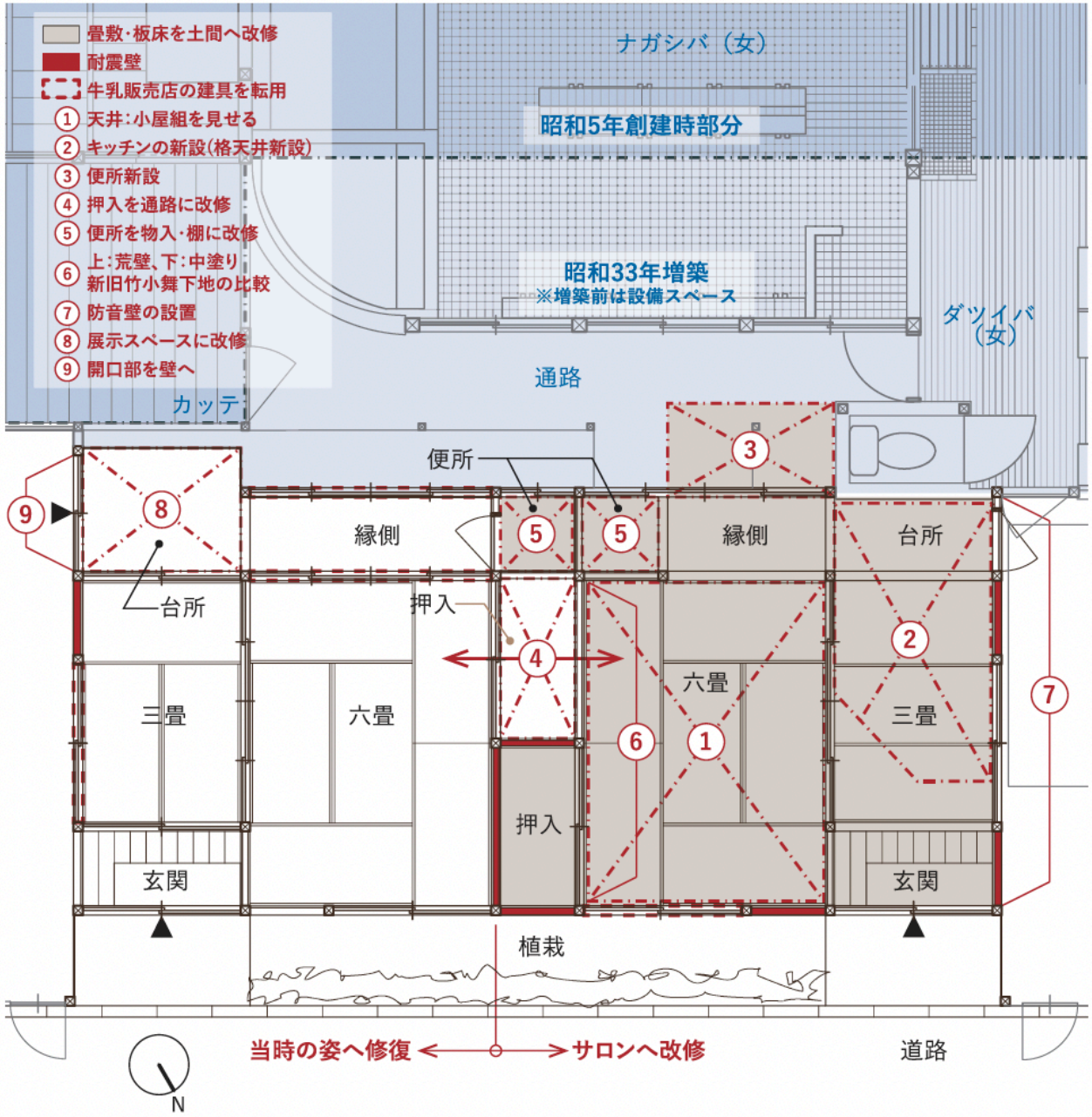
銭湯の二軒長屋を再生させる

銭湯が隆盛を極めた時代を伝える長屋

稲荷湯長屋は、元は旧中山道沿いに建っていた建物を稲荷湯の敷地に移築し、さらに現在の地に曳家されたと伝わる。その年は定かではないが、登記簿から昭和二年に既に現在の地に建っていたことが分かっている。最盛期には10人の従業員が長屋に住み込み、稲荷湯で働いていた。戦後は貸家として使用され、2つの家族により住まわれたが、20年程前からは一戸は空家となり、一戸は稲荷湯の倉庫として使われてきた。移築当初は独立して建ち、縁側に面した広い空間は銭湯関係の設備が置かれていたという。昭和三十三年に、利用者の増加によりナガシバやダツイバが拡張されると、長屋と銭湯の間は屋根や床板が張られ室内化し、従業員用の通路となり、設備は長屋の西側に移設された。稲荷湯長屋は空家となっていた一戸を中心に住居としての様子を良く残し、銭湯の大規模な職住一体経営の時代を窺うことができる貴重な建物である。本プロジェクトでは、このような長屋の歴史的・文化的な価値を最大限に生かしながら新しいスタイルのコミュニティスペースとして活用することとした。

銭湯とまちのワンクッションとなるスペース

かつての銭湯は、現在よりもコミュニティ拠点として機能していた。さまざまな世代や立場の人々が日常的に利用し、交流



長屋工事の概要図　1:80